

音源の比較試聴(54)

—ブラームスのヴァイオリン協奏曲—

1. 始めに

前報(53)に引き続き、各種音源の再生経路に関する仮想アースとアースアキュライザーや OPT ISO BOX や LAN iPurifier Pro などを含む種々の対策の効果の確認のため、各種音源の比較試聴を実施します。

2. 音源の比較試聴の試聴方法と音源

アナログ関係の対策の経過は前報(27)でも延べたとおりで、配信や CD 再生の光アイソレーションなどの対策は fidata HFAS1-S10 の活用シリーズや OPT ISO BOX の導入シリーズや LAN iPurifier Pro で報告してきました。

今回、同じ曲のアナログ盤、CD、STAGE+およびベルリンフィルデジタルコンサートからの配信を比較試聴します。

アナログ盤は下記を使用します。

EMI EAC-80305

ヨハネス・ブラームス ヴァイオリン協奏曲ニ長調 op. 77

ギドン・クレーメル(ヴァイオリン)

ヘルベルト・フォン：カラヤン指揮ベルリンフィル

CD は下記を使用します。

ドイツグラモフォン POCG-10055

ヨハネス・ブラームス ヴァイオリン協奏曲ニ長調 op. 77

アンネ・ゾフィー・ムター(ヴァイオリン)

クルト・マズアー指揮ニューヨークフィル

配信は STAGE+とベルリンフィルデジタルコンサートホールから上記と同一の曲を選択します。

ヨハネス・ブラームス ヴァイオリン協奏曲ニ長調 op. 77

ギル・シャハム (ヴァイオリン)

クラウディオ・アバド指揮ベルリンフィル

ヨハネス・ブラームス ヴァイオリン協奏曲ニ長調 op. 77

ジャニーヌ・ヤンセン(ヴァイオリン)

キリル・ペトレンコ指揮ベルリンフィル

それぞれの音源は、下記の経路で聴いていきます。

アナログ盤

LINN LP-12→ZANDEN Model 12→Brooklyn DAC+→TruPhase(A)

CD

EMT-981→TruPhase(B)→TruPhase(A)

STAGE+およびベルリンフィルデジタルコンサートホール

ルーター→スイッチングハブ→PC→Brooklyn DAC+→TruPhase(A)

3. 音源の比較試聴結果

アナログ盤は、レーベルに対応したイコライザー特性で聴いていきます。

アナログのクレームル盤は、1976年の録音で、クレームルの研ぎ澄まされた技巧的なボウイングがカラヤンの耽美的な表現をバックに生き生きと歌います。

CDのムターの演奏は、1997年の録音で、EMT981のアナログ的な音で。厚みのあるニューヨークフィルをバックにヴィブラートの効いた艶っぽい演奏です。

STAGE+のシャハムの演奏は、バランスのとれたアバド指揮ベルリンフィルをバックにシャハムが感傷的と思われるくらいヴァイオリンがよく歌う抒情性のある表現をしています。

ベルリンフィルデジタルコンサートのヤンセンの演奏は、ベルリンフィルのかっちりとした演奏をバックに、いつもどおりのダイナミックなボウイングで情熱的に演奏しています。

シャハムの演奏とヤンセンの演奏はともにベルリンフィルとの共演ですが、シャハムの演奏はイタリアのパレルモのオペラ劇場でのヨーロッパコンサートであり、ヤンセンの演奏は本拠地での演奏ですので、同じベルリンフィルでも、前者は音がよく協和し、後者は音が分離する傾向があります。

4. まとめ

アナログ再生と STAGE+からの配信を比較してみましたが、これまでの対策で、すべてにおいてレベルが向上しており、以前のような格差がなくなってきており、収録年代や収録環境ならびに奏者のこの曲の表現へのスタンスがよく分かります。

以上